

浜降祭



高橋昭和著

神奈川県無形民俗文化遺産
海の森神事日本一
茅ヶ崎海岸

浜降祭

七月十五日 早暁





昭23年浜降祭。なつかしいスタイルだ。後方は平島。



今から50年前(1925年)までの浜降祭は、

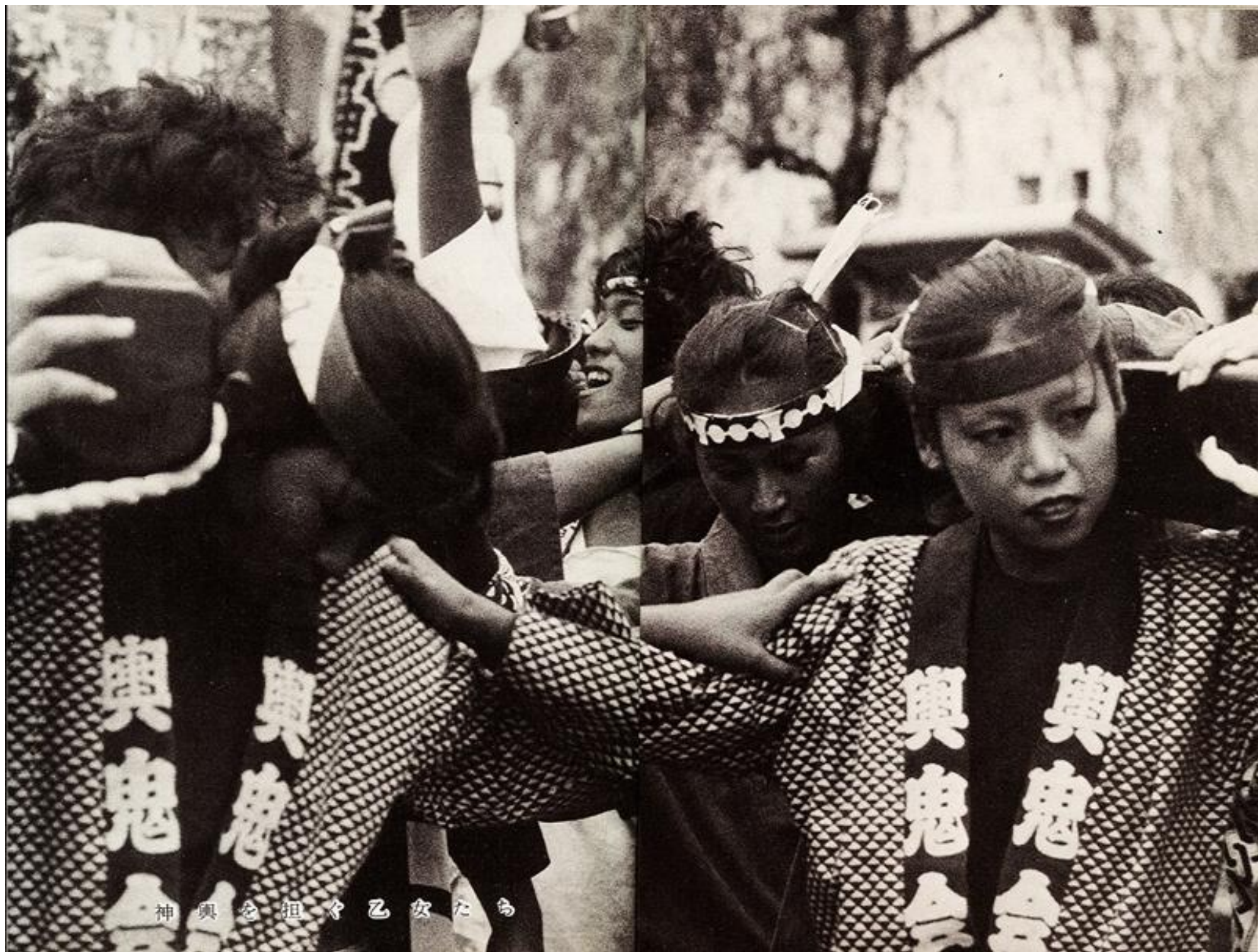
どの神輿も海水に入り、壊をした。後方は平島。



神輿が20数基以上も集まる海の祭典は、



この茅ヶ崎が全国で唯一とつだ。



神興を担ぐ乙女たち



“つゆ空を吹きとばせ”

とばかり政勢よく旗にとび込む磯島神社神輿。



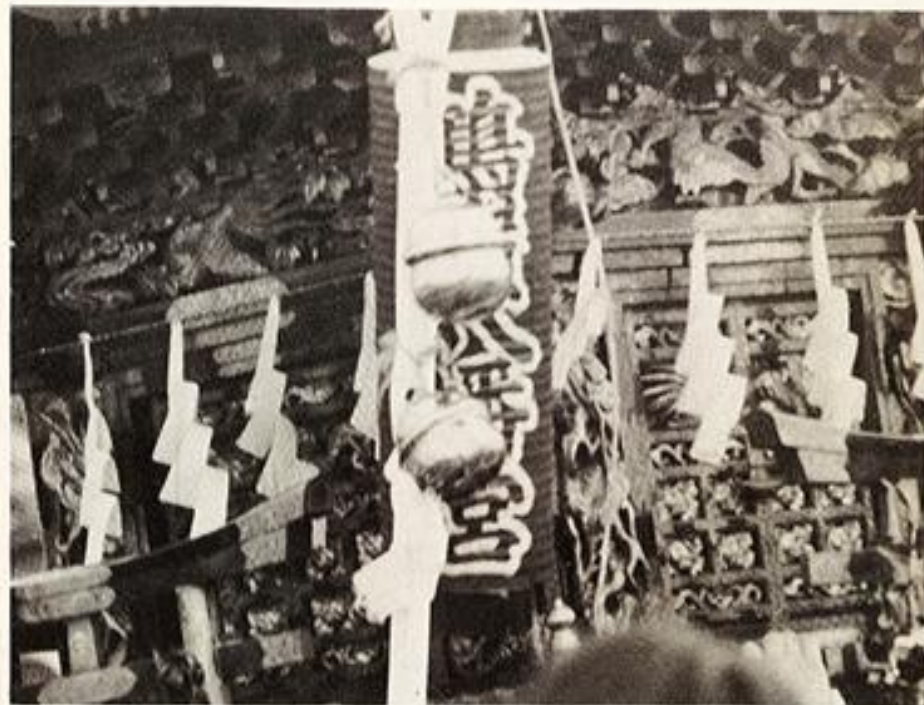
海中へザブン！ 威勢よく大神輿。



砂もりの礼



元禄15年(1702年)南湖の若者が肩の強いのを自慢して、鶴嶺八幡宮の神輿を2日間担ぎとおしたという。浜降祭の午後、なつかしい現場で、御弊参りが行われる。この事件のその後、茅ヶ崎の鎮守様には、次々とおらが村の神輿が誕生した。



建久2年(1191年)

今から千年も昔、浜降祭は禊の祭としてはじまった。鶴嶺八幡宮は、浜之郷、下町屋、円蔵、西久保、矢畑、松尾、茅ヶ崎、南湖の鎮守であった。



式 典



天保9年(1838)国府祭からの還幸途中、馬入川に落ち流された寒川神輿を、南湖の漁師孫七が拾った。寒川神輿は、それ以来お礼の印として、毎年一度茅ヶ崎の浜に渡御する。



早晩、続々と集まって来る神輿。
浜辺は興奮のルツボだ。



柳島佑の神輿は肩が強くて、担ぎ方がうまい。
(永野信行さん談)
式典が始まるというのに、なかなか鎮座しない。



神明さまの子供神輿は、他より大きい(坂巻満雄さん談)
大神輿にまじって、十間坂神明宮子供神輿。



1977年、世界カイト大会(アメリカ)で世界一となった伝
統の茅ヶ崎将棋ダコを先頭に下赤神明大神神輿。



お互いの神輿を称え合うところもあれば、時には喧嘩する神輿もある。
鎮守の氏神様はヒヤヒヤなのだ。



早晩、10万人の大観衆で埋まる茅ヶ崎の浜辺。



昭和52年 神奈川県無形民俗文化財に選択された浜降祭。新調神輿が続々。

(上)昭和50年寒川神社200kg(左)昭和51年西久保日吉神社600kg(右)昭和52年高田熊野権限450kg



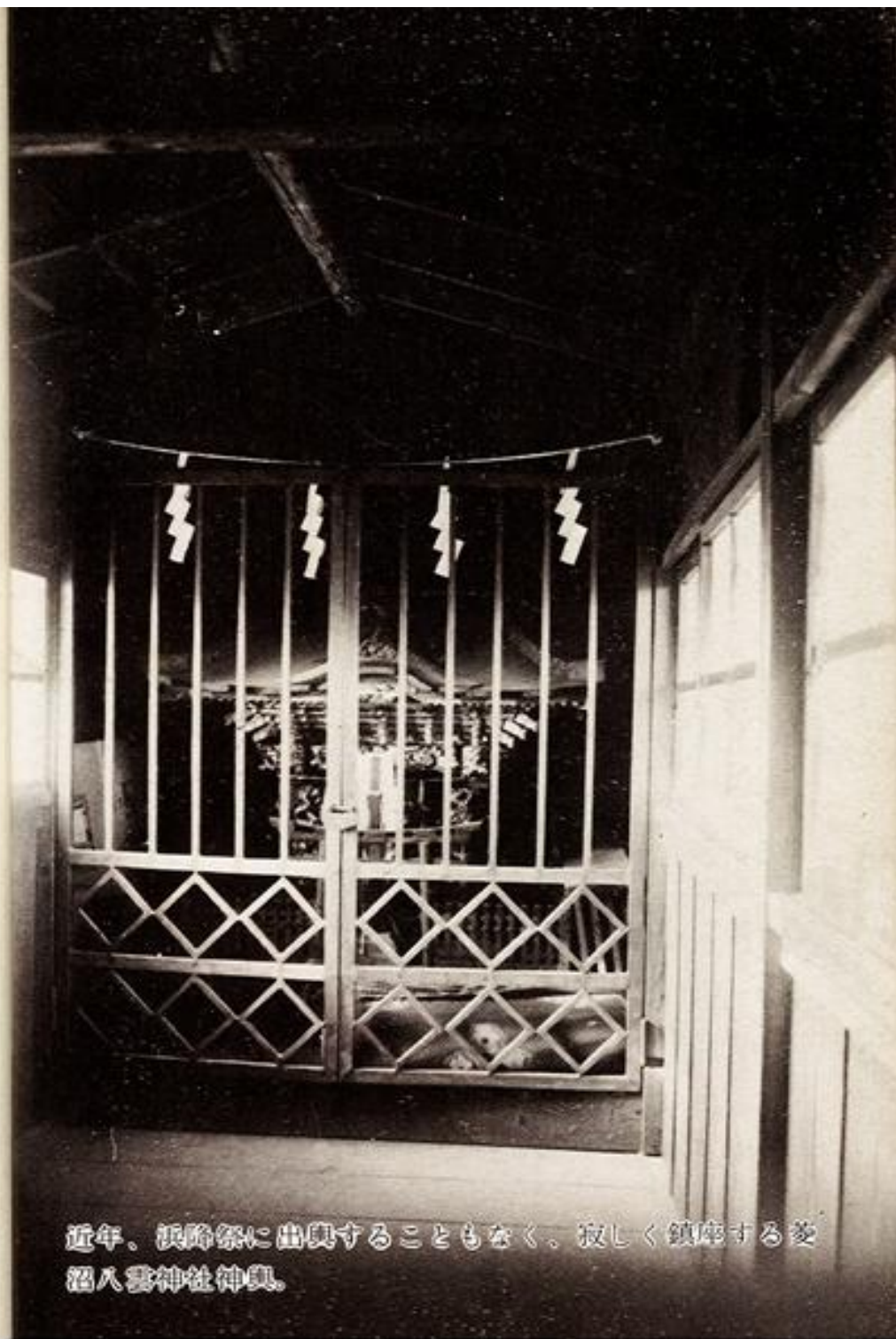
浜降祭から環幸した神輿は、部落まわりをして家内安全、無病息災を祈願する。

甘沼八幡(左)と香川(右)の神輿

浜降祭

昭和36年7月15日 神奈川県無形民俗文化庁
昭和52年2月9日 神奈川県無形民俗文化財

選 択



近年、浜降祭に出興することもなく、寂しく鎮座する姿
沼久保神社神具。



このお祭りのことを「みそぎ」といって私達の体についた世の中の汚れを海で洗い清めて、身も心も美しい人になろうという気持からおこったものなのです。重い御輿を仲間達と汗だくになってかっぴでいるその時に大切な幼なじみの味を…そして、一人でも力をぬいてしまったら、かっぴげなくなる御輿の責任を感じるのです。

私達のお父さんやお祖父さんは、みんな御輿をかっぴで、子供の時に美しい思い出を残しているのです。



はじめに

茅ヶ崎の夏の訪づれば、あの浜降祭です。日の出る前にははじまり、東の空が明るくなる時には、もう終りに近づきます。

体を清めた若者達が、自分の部落の印を先頭に、勇ましい掛け声で海に突進する御輿の数々、茅ヶ崎浜育ちの若者の心意気に拍手を送るひとときです。

このお祭りは古く鎌倉時代からあったようです。

もくじ

- 茅ヶ崎海岸浜降祭
- 瀬祭から浜降祭へ
- 南湖の神輿と重田八郎左エ門
- 寒川神輿と鈴木孫七
- 神奈川県無形民俗文化財
- 部落まわり
- 神輿のプロフィール
- 鶴嶺八幡宮
- 寒川神社
- 菅谷神社
- 南湖住吉神社
- 南湖八雲神社
- 南湖金刀比羅神社
- 本村八坂神社

37 36 35 34 33 32 31 28 27 26 22 19 16 7

- 下赤神明大神
- 円蔵神明大神宮
- 堤八坂神社
- 巖島神社
- 松尾大神
- 萩園三島大神宮
- 柳島八幡宮
- 甘沼八幡大神
- 十間坂第六天神社
- 十間坂神明神社
- 中島日枝神社
- 御霊神社
- 茶屋町大神宮
- 西久保日吉神社

52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 39 38



芥沢腰掛神社
 高田熊野神社
 高田日枝神社
 香川か組
 下町屋神明社
 上赤八雲神社
 菱沼八王子神社
 矢畑本社宮
 浜降祭の隆盛に役、輿息会
 神輿を造った神輿野郎
 神輿甚句
 全国の若者に受けている有名神輿一覧見
 あとがき

83 80 67 64 61 60 59 58 57 56 55 54 53

神奈川県文化財図鑑

民俗資料無形文化財篇

昭和48年版による

茅ヶ崎海岸浜降祭

ちがさき はまおりせい
 七月十五日末明、茅ヶ崎市南湖の海岸で行われる袂ぎの神事。
 これを浜降はまおりと称する。

茅ヶ崎市浜之郷鎮坐鶴嶺八幡宮の神輿、
 高座郡寒川町鎮坐寒川神社を始め、両市
 町の神輿二十数基が集合し、朝潮の海に



は六月二十九日楔ぎ、寒川神社の神事は六月三十日であった。すなわち、水無月、抜として執行されたものである。

明治六年十二月、鶴嶺八幡宮は寒川神社の摂社となった。で、

翌七年には共同で執行した。

明治九年、その祭日は現行の七月十五日に変更された。その理由は農繁期を避けるため、当時の神奈川県権令野村靖へ願出て許可された。

その翌十年三月、鶴嶺八幡宮の摂社が解除された。その後は、両社ともに単独で行っていたが、大正十二年に改めて浜降祭を共同で執行したと



みそぎし、すこぶる壯觀を呈する。楔場には八大龍王を祀る聖地があつて碑石が立っている。この地は寒川大神降臨の故地、或は天保の寒川神輿漂着地とする伝承もある。

また、鶴嶺八幡宮（浜之郷・下町屋、田蔵、西久保、矢畑、松尾、茅ヶ崎、南郷七村の鎮守なり）が附近の海岸で、古くから楔ぎの神事を行っていたことも確実であつて、現在の楔場と浜降祭の関連性は、その地理的変遷とあいまってはなはだ微妙である。

古来、鶴嶺八幡宮（浜之郷、下町屋、田蔵、西久保、矢畑、松尾、茅ヶ崎、南郷七村の鎮守）



伝えられる。鶴嶺八幡宮、寒川神社、両社の関係の複雑さは以上の経過によっても推知されるであらう。

さて、祭名の^{はまお}浜降りには、ハマクダリとも言われ、全国に共通する称呼であって、海岸地帯の祭礼には必社の行事であった。しかし、全国に共通するそれらは当該神社だけの浜降りであって、茅ヶ崎のそれのように、二十余基の参加する盛観は極めて稀れである。

しかし、茅ヶ崎海岸浜降祭の盛観は大正以後、茅ヶ崎の都市的膨張に因るものである。

明治十二年、二基、明治十三年五基

明治十四年 八基、明治十五年六基

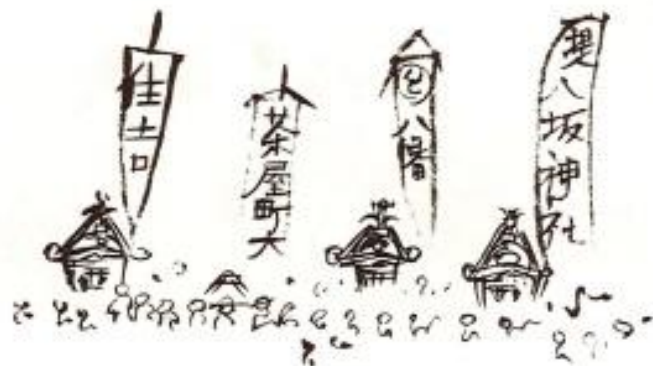
明治三十四年 不景気中止、明治三十七年 奉幣のみ
明治時代の茅ヶ崎の性格はまだ農村地帯とい
べきであった。

時は流れた。大正時代を迎えて、茅ヶ崎は東海道線の周知から次第に農村性格の脱皮を余儀なくされていた。村から町へ、そして大きな市へ成長した。かつての農村の経済的發展は、鎮守の神々の神輿造りとなった。

大正四年の浜降祭には初めて十二基の神輿が参加したのである。その後も増加をうけて、昭和三十四年には、左記二十三社の神輿が渡御した。

鶴嶺八幡宮(茅ヶ崎浜之郷)、寒川神社(寒川宮山)





神明大神(茅崎下赤羽根) 腰掛神社(茅崎芹沢)
 日枝神社(同 高田) 八坂神社(同 堤)
 八幡神社(同 甘沼) 茶屋町八幡(同 茶屋町)
 八坂神社(同 本村) 御霊神社(同 鳥井戸)
 八幡宮(同 柳島) 金比羅宮(同上町)
 第六天神社(同 十間坂) 八雲神社(同 中町)
 神明宮(同 十間坂) 住吉神社(同 下町)
 神明大神(同 円蔵) 日枝神社(同 中島)
 巖島神社(同 新町) 八大龍王社(同 中海岸)
 三島神社(同 萩園) 中海岸神社(同 中海岸)
 菅谷神社(寒川岡田)
 行列の順序は一定し、先駆は鶴嶺八幡宮とし、中央に寒川神社。その前方に菅谷神社



後方に腰掛神社と堤八坂神社が続く。この三社は寒川神社と親縁のある古社である。その他の参加神社は毎年七月五日、神社代表者が寒川神社に集り、くじ引きによって順位を決定する。さて、翌昭和三五年には二十六社が参加した。これに子供たちの小神輿も加わった。この盛観は両三年つづいた。その間に県の無形民俗資料に選定されたが、同四十年には左の十三社に減じた。鶴嶺八幡宮、下赤神明神、第六天神社、本村八坂神社、巖島神社、円蔵神明大神、寒川神社、堤八坂神社、住吉神社、茶屋町八幡、金比羅宮、八雲社。この現象は宅地・団地などの造成が行われ、農地が失われ、給与生活者が増加して祭礼

浜降祭の歴史



に神輿をかつぐ者の少なくなった結果である。しかして、昭和四十六年には神輿数わずかに六基、(寒川神社、菅谷神社、腰掛神社、堤八坂神社、下赤神明大神、円蔵神明大神など)交通事情等で参加する神輿の数は減る一方)明治五年と同数にまで激減した。

かくのごとく、茅ヶ崎海岸浜降祭は、明治以来の茅ヶ崎周辺の都市化と社会構造の亦々遷を受けて、神輿の参加は隆替の激しい歴史を繰返している。





「南無八幡大菩薩」「佐塚大明神」の信仰は、茅渟に多くの氏子や信者を集め、鎌倉時代・江戸時代の昔から、郷土の信仰の中心であった。

素直な心になることが、どんなに大切か、またどんなに困難なことか、(人間は本来まっすぐな心や、清らかな自然な心を持っているもの)、祖先は考えた。むずかしい話で、ヤキモキするよりも「祭り」をすることによって、「神」に近づき、ほごうの人間の生き方を教えてもらった。

楔の心は祖先の心、私達の心ふるさとには「祭り」の行事にしっかりと伝えら

1191年
建久2年



楔祭から浜降祭へ

今から千年も昔の話。海は東海道のあたりまで、ひたひたと打ち寄せたといわれる。そして、八丁松並木といわれる景色の美しい鶴領八幡宮の参道先で「楔祭」が祖先の手によって、おごそかに行われていた。

鶴領八幡宮では毎年六月二十九日になると神輿を海辺に担いで運び、海の水を浴びて体についている罪非やけがれを洗いながし、まっすぐな心と健康な体で生活ができるように祈った。

1702年
元禄15年



元禄十五年のものがたり

南湖の神輿と重田八郎左エ門

古来南湖の漁業が盛んなころ、鶴領八幡宮の浜降祭は、神輿が南湖の浜へ渡御する時、漁家の肩に替り、海岸を練りまわった。

榎の後、帰途につく時は、鳥井戸あたりから

宮元の若者が替りて宮入りしたのであるが、

元禄十五年(一七〇二)年、浜方の若者が肩の強いのを自慢して、神輿を宮元へ渡さず、遂に夜になっても翌日になっても渡さず、宮入りができないので、世話人に交渉したが渡さない。

そこで江戸家重田八郎左エ門が仲裁に入り、



れている。

したがって、ササキ崎の明治生まれの人達は、へラでも浜降祭のことを、

「榎みぎきに行く」

「榎まつり」

「神輿を担ぐ」……

というように、昔の上言葉を使っている。

現在行われている、浜降祭は、合祭、ともいわれ、鶴領八幡宮が遠い昔から行っている、榎まつりから見ると、新しいもので、浜降祭という新しい言葉にかえられているということになる。

江戸屋



とにかく宮元へ託ぎをいれ、その証として、鶴嶺八幡宮の前庭の低い石垣や、石段を奉納することとして、一応和解し宮入りがようやくできた。

一方浜方では、一社でも神輿をつくり若者にかつがせたい一念で、江戸家重田家の屋敷神を天王山に祀って八雲神社とした。それより中町に八雲神社の神輿ができ、次に上町金刀比羅神社、下町住吉神社の神輿ができて、浜方ではそれより鶴嶺八幡宮の神輿をかつぐことはなくなった。江戸家の仲裁により和解ができ、神輿ができたことのお社として浜降祭の午後、南湖社は、神輿をかついで

江戸屋へあいさつに行く習わしとなっていた。現在では、五穀豊穡、大漁祈願、無病息災を祈る御赦中参りという式典のみ行われている。



1838年
天保9年



寒川神社の神輿と鈴木孫七

天保九年のものごとり

南湖の天王山南側に住む細元鈴木孫七家は、代々、天孫（テンマゴ）と通称される。同家は寒川神社の御旅所神主を勤め、祭礼の都度、寒川神社から使者を立て、準備万端を依頼する。献饌・盛砂・注連張りなど。古くは風折烏帽子・素襦・近年まで麻上下を着用し、帯刀して最初に玉串を奉奠した。それらは御旅所神主として当然の祭務であるが、同家と寒川神社のあいだには由々しい口承が残っている。



天保九年（一八三八年）、国府祭から還幸途中の寒川神輿が平塚馬入川の渡し場に到着し、まさに渡船に乗ろうとした時、平塚八幡宮の神輿を担ぐ馬入の者の狼藉に遭遇して、神輿は川に落ち、折柄の梅雨に増水した激流は神輿をはるか相模灘まで押流してしまった。その狼藉の原因は明らかでないが、馬入の者が八幡宮の神輿を担ぐのは当然であり、また、八幡神輿は寒川神輿をこの渡し場まで見送る羽目なし



だったと言われている。狼藉者十六人は打首の刑を受けたが、実際は江川木郎左衛門の温情により、丁シ髷を切落されただけで事済みとなった。その髷は馬入の蓮光寺(平塚八幡の供僧)に埋葬され、丁髷塚となったが、事件当時、唄の新宿、喧嘩の馬入、怒らず帰る須賀の者」という流行歌が生まれたという。

さて、神輿流失という不幸事に、寒川神社では茅ヶ崎海岸の村々に三百石の報償付きで捜査を依頼した。数日後、南湖の海で地曳網を曳いていた鈴木孫



七は、海中に沈む神輿を発見した。引揚げて、家の後方の石尊山に奉置し、一宮に急報した。二日後、神輿は寒川に戻った。天孫家は謝礼として若干の社地を頂いた。その社地は終戦後の農地改革まで同家で耕作していた。

口承によると、洪降祭は、この神輿拾得の縁にちて天孫アマノミコの漁場である南湖で行われ、同家は御旅所神主を許された、といふ。同家には神祇官の白川家から天保十二年正月、同五月附の二通の古文書が現存。これを見る限り、この口承の信実性は認められる。



神奈川県無形民俗文化財

浜降祭は茅ヶ崎市と寒川町全体の祭典である。7月14日宵宮は、各地神社では、神官によって、地元の氏神様を神輿に移す、式が行われる。

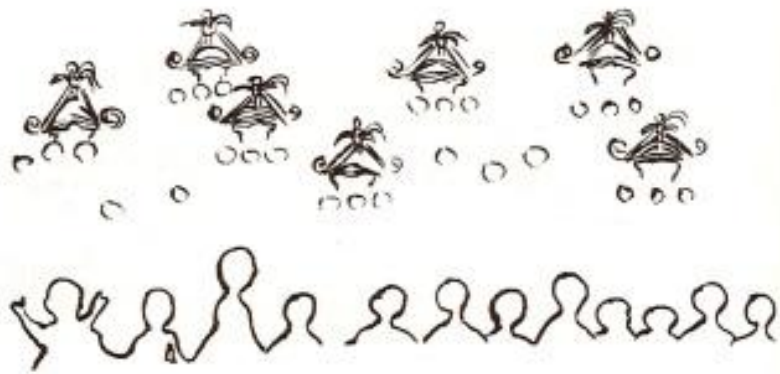
（禾を神霊移しと云う。）

ゆえに茅ヶ崎の浜降祭による神輿の役割りは、地元の氏神様を、茅ヶ崎海岸まで移動させる時の乗りものである。

「ドッコイシエ」の掛け声で、神輿をもちむ。神輿を振れば振るほど、神様は喜ぶとされているが、時代の移り変わりは、人間の心を亦変えてきた。

神霊が入っていない江戸三社祭の町内神輿のまねをして、神輿に乘る馬鹿ものがある。神聖な神輿を大切にしたい。

また氏神様（神輿）が20数基以上も集まる海の祭典は、この茅ヶ崎が全国で唯一つである。その神輿



の数に対して、神奈川県は無形民俗文化財に選抜した。

部落まわり

茅ヶ崎海岸へ渡御した各地神社の神輿は、そこで得られた海の幸を各家々に持ち帰り（還幸）、それを小りまく。称して「部落まわり」。家内安全、無病息災を、どの家にも祈願して、神輿は練り歩く。神輿が休憩するところは、向か所が決まっています。そこで神輿に対して、各家々からお礼のお供えが行われる。

それは、お酒、お賽銭、おにぎり、子供にはアイス、ジュース、お菓子、畑の新鮮なトマトといった類である。それは、上宮入りとなる夕方まで続く。大人神輿は、もうすっかり酔って、村の氏神様はチドリ足となっている。

コミュニケーションにかけている現在、浜降祭の果実す役割は大きい。

「ああ君も、心の健康を、とりもどすため、ネクタイをはずして、鎮守の神輿を担ごう。」

神輿のプロフィール





この神輿
金三十七両

鶴嶺八幡宮浜降祭

浜之郷四六二

神輿製作年

文化三年

神輿重量

四五〇KG

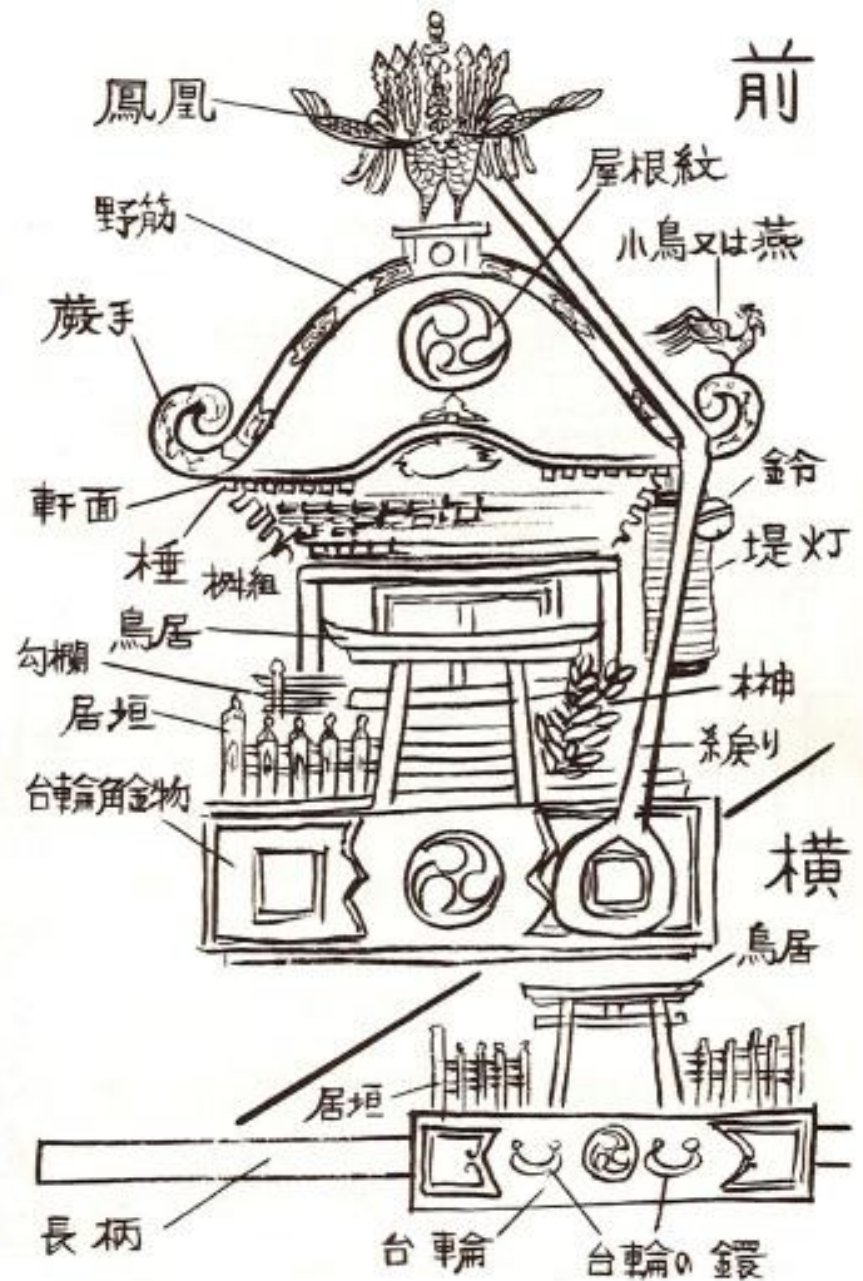
茅ヶ崎二古へ、

まのこまかくできている。

長く保存するため、

今修繕中

尾坂芳彦さんの話





寒川神社浜降祭

寒川町宮山

神輿製作年

昭和五十年

神輿 重里

BOOK 5

寒川の古い神輿を、もとにして、浅草で造った。菊の御紋が付いている。氏子＝宮山、一之宮口

三沢誠さんの話



菅谷神社浜降祭

寒川町岡田ニ。一九

神輿製作年

天保五年六月

神輿 重里

寒川標着説の神輿だといわれた。

傷んでいるので、今年担ぐと、お水もどきはなにかと心配された。氏子＝菅谷地区、岡田太蔵小敷

三沢誠さんの話

大小二基



住吉神社浜降祭

南湖五―五―一

神輿製作年

文化五年

神輿重量

甚句がうまい。

漁師、舟渡を歩いているので足が丈夫。

肩が強い。担ぎ方がうまい。

海に入るまで有名。海水との多シシグと海の

様子を知らず。潮の状況で海に入るを危

浅し。満潮には入らない。満潮に入ると、端神

の担ぎ手が巨体をもち、後が海に入らぬうちに、神輿を傾けた

りして危険である。と三橋正さんの話

大小二基



八雲神社浜降祭

南湖四―四―二十九

神輿製作年

神輿重量

400KG

屋根が小さくて、ずんどう

彫りものがひと味違う。

彫刻に力を入れたあるため、

胴がずんどうに見える。

不安定感のある神輿。

主月木道男さんの話

大小二基



金刀比羅神社浜降祭

南湖三ノ四、四〇

神輿製作年

江戸末期

神輿 重量

四二〇KG

見て世間では、一目でわかるが、屋根の造りに特徴がある。

ササケ崎には、一つしかないでしょう。

増田正一先生の話

大小二基



八坂神社浜降祭

ササケ崎一六二八

神輿製作年

明治二十三年

神輿重量

六〇〇KG

屋根紋が違おう。
重さはササケ崎で二、三
それと本村は
みんな神輿気遣いです。

鈴木重雄先生の話

大小二基

神明大神浜降祭

赤羽根 四六八



神輿製作年

大正二年

神輿 重量

四五〇KG

他の神輿と恰好が違う。
屋根が高く、胴が長い。
孔雀の尻尾がたっている。
私の三代立前の佐重が、お起人
となって百七の円では造った。

鯨鬼の頭からくっついているから、
下赤の神輿には悪友着がある。

川辺勝雄さんの話

この神輿

八十五円也

吉野博さんの話



神明大神宮浜降祭

円蔵 二二八二

神輿製作年

明治十三年

神輿 重量

四五〇KG

屋根紋がない理由。昔は、
神輿には屋根紋があった。位が、
よくて紋をつけなかつたので、
の分がある円蔵の神輿は、
屋根のそりがない。屋根紋の持神輿は
浜降祭では、
は、昔は長柄が、
る重は、



白旗さんの飾り神輿を買った。元は菊の御
紋がいた。神輿は堤下が管理していたが、配落
和合のため、堤上・堤下共同で修理し、昭和十二年に
はじめの浜降祭に行った。その時は藤沢市の遠藤
からも南湖の海岸まで神輿を担いで出していた。
それが昨今、自動車で、西浜海岸まで持っていく
なんて寂しいものだ。 村越市郎さんの話

八坂神社浜降祭

堤

神輿製作年

神輿 重量

三〇〇KG

神明大神宮近年浜降祭出輿せず

円蔵 ニニ八二

神輿製作年

大正八年

神輿 重量



子供神輿 大正八年に私の父喜一郎
が造りました。
四方唐破風、増組は三手先のすば
らしい神輿である。

大神輿も同じ造りで、明治十三年
十月十五日に造った。まもなく百年、百
年祭をやろうという動きがあります。

吉野 博さんの話

大小二基



巖島神社浜降祭 42

新栄町二一〇

神輿製作年

大正八年

神輿重量

三六〇KG

今までのま素朴な鎌倉型主神輿から形体も変え昭和四十九年に浅草で修理した江戸型主神輿。

金ヶ池が泳ぎである。

北條原貞一さんの話

松尾大神浜降祭

今宿五八六

神輿製作年

昭和三年

神輿重量

五五KG



大人と子供の間くらい大きさ。昔は、

子供では泳ぎで担ぎきれないので、青年も

担いだ。子供神輿では、よい方だと由緒、

それとも一つ、今宿には芝を踏二、三を踏言の

山車があった。残念なきに昭和甲午年頃、神楽

殿に寝ていたを食が火火を起し、焼失してしま。教田実さんの話

大小二基

三島大神宮浜降祭

廿秋園一七二九



神輿製作年

昭和二十五年

神輿重量

四五〇KG

皇天工である父喬を亮が図面を引き、
三宮で造られた。特徴は鳳凰で、遠くから
見ても秋園とわかる。

本体は白木

輿自体に品がある

角田 雪夫さんの話

大小二基

八幡宮浜降祭

柳島三三一



神輿製作年

昭和二十三年

神輿重量

五五〇KG

神輿好きが大勢いた。
肩を抜かないので、神輿を担ぐには
必至だった。

第二次世界大戦で神輿が焼失し、
今の神輿は、戦後千葉で造られた。
江戸型神輿のように、担ぎ方の練習を
せしなくても、柳島は担ぎ方がうまい。

永野信行さんの話

大小二基

八幡大神洪降祭

甘沼二九二



神輿製作年

明治二十六年

神輿 重量

四五〇KG

総体的によい神輿です。

神輿は、金泊を塗る前に、白木のままです。

昭和52年の修理で、屋根を塗り替替え、

彫りものを洗いました。

金具も美しくなりました。

沼上伊次郎さんの話



第六天神社洪降祭

サアケ大崎三五八一

神輿製作年

明治二十五年

神輿 重量

五〇〇KG

彫りものが美しい。

四本柱は彫ったもので、金具をとり付けたものではない。

彫刻のよさは、

洪降祭示の中でも一、ニでしよう

と桜井明彦さんの話。

神明神社浜降祭

十間坂

神輿製作年

神輿 重量

子供の頃

神明さまの子供神輿は
他より大きいと、
自慢したものです。
格好もいいですね。

坂巻清雄さんの話



大小二基

日枝神社浜降祭

中島町一三三田

神輿製作年

明治五年

神輿 重量

450KG

自分の部落の神輿がすから、大変気に入って、
担いでいます。つい先だって、修理の話が出ま
した時、年配者から「これだけの立派な彫り
もさ、原形を維持したまま金泊がうまく
resurfacingされたらいいな」といふ話もありました。それ

ほつ彫りかたが、今も金泊でかまいません。中島は、いふある金泊です。

担ぎ方は、昔から時々走る事が伝統になっています。まあ土地の神輿はかわいさね、好評な祭事さ

豪華な山車から子供神輿



茶屋町大神宮浜降祭

南湖二丁目

神輿製作年

昭和三十年

神輿 重量

八〇KG

茶屋町には神輿がなく、山車^{だし}があった。七月十四日は、浜降祭の宵宮で、夜どうし若者が山車を引っぱった。

山車の上には、若者が乗っていて、若者がタイコを打ったり、太鼓を打つので大変な賑わいであった。一国道が砂利からアスファルトへ、山車を引っぱる時代ではなくなったので、山車を横須賀に売って子供神輿を送った。重甲英弘さんの話



御霊神社浜降祭

南湖二九一〇

神輿製作年

昭和三十一年

神輿 重量

中型の神輿。

小さいわりに

大神輿並にできている。

加藤敏夫さんの話

大小二基



日吉神社浜降祭

西久保四六六

晴

神輿製作年
昭和五十二年
神輿重量
六〇〇KG

昭和五年首目お披露目。
昭和五年までは鶴嶺備前宮の神輿を二輛にかけたが、右側の首頭を豊分左の首頭と持とうという事になった。二百数十名を可付けし、千数百万円余もかけた。昭和五年元注以来十か月の日教で完成。
茅ヶ崎でも、二を競う重さあり。

大小二基



腰掛神社浜降祭

芹沢二一六九

神輿製作年
昭和十年
神輿重量
四〇〇KG

大山の宮大工が造った。
形が非常にいい。
神輿らしき、
神輿である。

相田 賀寿本さんの話

熊野権限浜降祭

高田一五七一

神輿製作年

昭和五十二年

神輿重量

四五〇KG



金泊の彫りものは、きれいです。茅ヶ崎流にしてほしいという事で造った。

長柄まで白木の浅草で造った。

すばらしい御輿だ。

久保田サカ弘さんの話

日枝神社浜降祭

高田一五七一

神輿製作年

昭和二十二年

神輿重量



目取高にいいですね。

特に彫りものがいい。

孔雀が大きいし、

江戸型でなく、本当の茅ヶ崎流です。

久保田サカ弘さんの話

大小三基

か組神輿

香川 九七三

神輿製作年 昭和五十一年

神輿 重量 四五〇KG



下町屋神明社近年浜降祭出陣す

下町屋三九二

神輿製作年

明治四十二年

神輿 重量

五十五KG



昭和の初期、小島伊勢松さんが造
った。(寄贈)

けやきの白木で立派なもの

昭和10年頃から、

お賽銭で除々に鈴を下げたり、

金泊を塗ったりして修理されている。

内藤興さんの話

八雲神社 近年浜降祭出輿せず

上 赤羽根

神輿製作年

明治三十七年

神輿 重量

田八〇KG

距離が遠くて、南湖の海岸まで持ちきれないので、最近では浜降祭に行かない。去年は修理をして、再び浜降祭に行こうという声がある。小沢佐三郎の話



八王子神社 近年浜降祭出輿せず

美々沼七二八

神輿製作年

明治中頃

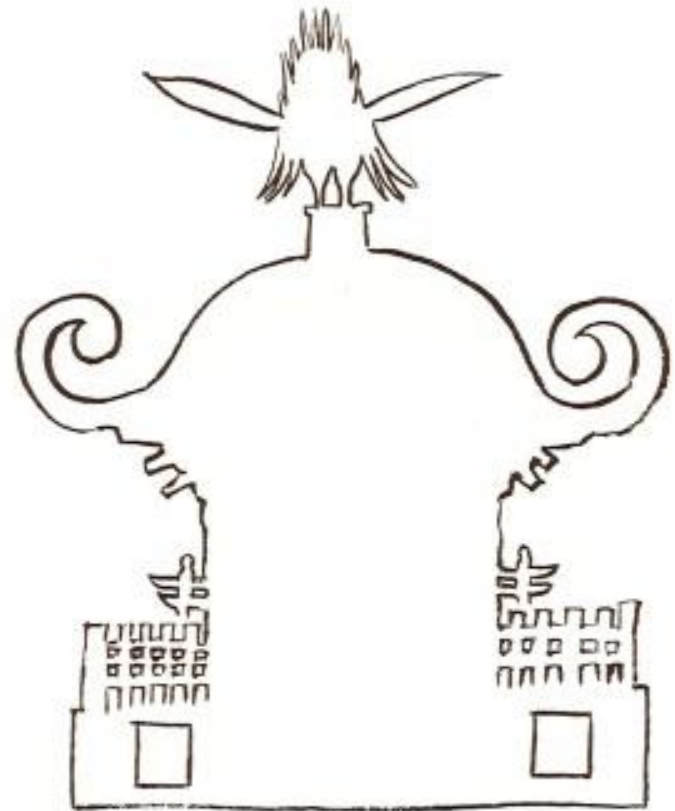
神輿 重量

六〇〇KG

昔は浜降祭に行だが、何しろ重い、海に行くのがやっだった。それで浜降だけ地元の美沼海岸で七月十五日裸をした。銀代石屋↓電極↓旭が丘の碑↓美沼海岸が神輿道で、早朝四時出輿、神主の御被などがあつた。昭和四十年頃交通事情の悪化等で今は中止されている。

水島さんの話





本社宮

矢畑一四三

神輿製作年

昭和五十三年完成予定

神輿重旦里

今までは、鶴山嶺八幡宮の神輿を担いでいたが、若手の音頭で、おらが村の神輿を持ちつづけることになり、昭和五十三年の完成を待ちしみにしている。

浜降祭の隆盛に役 輿鬼会



昭和五十一年の浜降祭は、二十七

基という戦後最大の神輿の数と、10万人の見物人とで広い砂浜は埋めつくされた。

明治三十四年不景気

中止、昭和四十六年交

通事情等による神

輿数わずが六基など総数多の変遷を経ながら、浜降祭は、

新しい隆盛を見せはじめた。



TEL八二四八四、初代会長伊沢正昭、新栄町
 二一TEL八二二〇三、会員十五人）
 祭心連（会長山田猛、十間坂一十八、
 TEL八三二二三三、八会員二十三人）
 南湖睦（会長石黒喜代志、南湖六一三
 一、二九、TEL八五一八七八、会員十三人）
 若草睦（会長島崎隆行、十間坂一四
 一六〇、TEL八二一六三三九、会員五十一人）
 一方、このふるさとの伝統ある祭りを、
 村を上げて保存しようと、昭和五十年に、中
 島神輿保存会（会長、高崎泰三さん、会
 員七〇人）が誕生したのを、皮切りに続々
 その気運がある。



お祭りが好きで、神輿が大好きという小池昭義さんという若者を
 中心に、昭和五十年九月、興鬼会というグループが誕生し、神輿を、
 かつぐ事が好きな人々によって、次々に愛好会なども生まれて
 いる。

興鬼会（初代会長 小池昭義 香川一三四 TEL八三
 五二九九、二代会長 小池義男 実川町大曲三五六一
 TEL七五五五三〇、八会員三五人） 密会 昭和五十年月
 明興会（会長 菊地伸和、菟園三〇五、TEL八三二二三三、
 初代 新倉邦雄、菟園三四九、TEL五〇七、六会員三十八
 か組（初代会長 留井井茂 香川九七三 TEL
 八二一九五七三、八会員五十一人）
 浜降睦（会長 三橋孝幸 町一八一二、

神輿を造った 神輿野郎

香川九七三 亀井茂さん

瀬神事では日本一といわれる古式豊かな
お祭、浜降祭！

この浜降祭の一基に加わろうと、寝食も忘
れお神輿を造ったお神輿野郎がいる。

その人は、大工の亀井茂さん（二十五歳、昭和
五十二年当時）。

亀井さんは、小さい時からお祭りとお神輿
が大好きですが、香川にはお神輿が無く、い
つも他地区に担ぎに行って肩身の狭い思いを



したという。いつでも、誰れでも担げるお神輿がほしい。だがお
神輿を業者者に依頼して造っても、とうとう一千万円以上からの金が必要。
それでは、自分の仕事を生かしてお神輿を造ろうと思ひ立ち、あ

ちこちのお神輿を写真にとったり、間近で見
せてもらって、まず手初めに、床の間に置ける程
の大きさの模型を造って自信を得て、昭和五十
年の三月頃から大きなお神輿造りにとりかかった。
初めの頃は失敗を恐れ、何を造っているのか家
人にも言わなかった。仕事の合間や休日を利用し、徹夜を何日もして念願のお神輿がよ
うやく一年目で完成。このお神輿は、重さ四
百五十キログラムで本格的な大人用神輿です。





「いいかげんなものは造りたくない、お神輿は自分よりも長く生きるのだから恥かしくないものを造りたい、そのためにも、完成するまで、仕事を休んで浜降祭を目指し、精魂を込めて造りました。」と亀井さん、

また、お神輿を造ったことよって、茅ヶ崎ばかりでなく市外にも多くの友人が出来たこと、今まで友人も居なかった地域の孤独な少年が、お神輿を通じて友人が出来、性格が明るくなった少年の母親からも感謝されている。亀井さんは、「お神輿を担ぐ人は常識を持って担いでもらいたい。お祭りには、けんかや酒の飲み過ぎ等はつきものだと思ってる人がいるが、恥かしいことである。二ついうことは、無くして、茅ヶ崎の祭りは安心して見れるようにしたい」と。

神輿甚句



一に相州の一宮ニで日光の東照宮
 三で讃岐の金毘羅さん
 四また信濃の善光寺
 五つ出雲の大神
 六つ村々鎮守さま
 七つ成田の不動さん 八つ八幡の八幡さん
 九つ上高野の弘法さま
 十で東京の名高い招魂社
 これだけ神願かけたのに
 好いたおとと添えぬなら
 神や仏は
 いりやあしない エミイニエー



茅ヶ崎甚句

茅ヶ崎名物 ーく 左富士
 上り下りの東海道
 松の緑の吹く風は
 昔も今も変らねど
 富士の高根と男だて
 相模 おのこの
 晴次女



送りましたようか送られましようか
 せめてお宅の門^{かど}までは
 鳴くな ちゃぼっ鳥
 まだ夜は明けぬ
 明けりゃ夜明けの
 鐘がなる



サーサー皆様お歌いなさい
 歌じゃごきりょうがさがりやせぬ
 さんぜん世界のからすをころし
 おまえさんと
 朝寝がしてみたい
 白さぎみたいな
 お方にほれて
 からすみだいに苦勞をする



つぼみ松葉をあれ見やしゅんせ
枯れて落ちても 二人連れ

私しや茅ヶ崎

荒海育ち

波も荒けりや

気も荒い

咲いてみごとな小田原つづじ
もとは箱根の山つづじ



信州信濃のしんそばよりも
私しや あなたのそばがよい

色で売り出すすいがでさえも
中にや 苦労の種がある

ついださがずき中みて お飲み
中にや 鶴亀 五葉の松

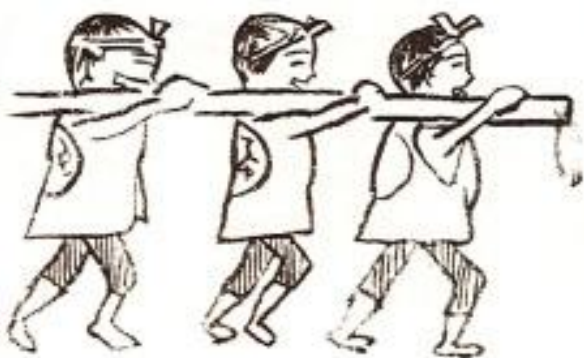
甚句歌うまないなせなネハんと
共に苦労がしてみたい



お江戸日本橋あれかすかに
 見ている淀よどのかわせの水車
 亭主ていしゅの乗るのが御所車
 偉人の乗るのが馬車ぐるま
 ぼひやの持つのが
 〇ピューピューがぐるま
 家の借金火のくるま
 二階のネエちゃん
 だまされました
 〇ぐるま



大磯名代の春は
 花咲くさかた山
 秋はもみじのそとで
 聞いて下さい皆様よ
 八重子さんと五郎さんの物語
 東京静岡その中は
 なるほど遠い仲なれど
 汽車の線路じやあるまいし
 愛という一字は墨すみで書く
 たとえ両親ゆるさぬも
 神は仏ほとけはゆるすもの
 死んで花見が咲くものか



思いよせこそとどかぬ恋は

たかが漁師の子せがれが

およばぬ鯉の滝のぼり

私じゃ私じゃうなむらじらふぢやない

ほんとにあなたが好きなのよ

電信柱につばめがとまる

停車場、停車場、汽車とまる

港、港、船とまる

止めて止まらぬ恋の道



竹になりたや八句の竹に

さきや恵比寿のつりざおに

中はおさんどの火吹き竹

元はこくせはヤリの尺八に

尺八、八にと申すには

つまらぬところに穴あけて

五本の指で

あちやこちやと

未は

夫婦となるわいな



娘十七、八や

嫁入りざかり

たんす長もち はきみ箱

これだけでもたせてやるからにや

二度と戻ると思ふなよ

父さん母さんそりや無理だ

西が曇れば風とやら

東が曇れば雨とやら

千石積んだ船でさえ

波風あちけりや又戻る



村のたんへいさんが

シシをたいじせんとい

ひと山こえてもシシおらす

ふた山こえてもシシおらす

み山の奥のその奥で

ドンとうったる二つ玉

シシかと思えば旅の人

しまのやいふい

五十両

かして下され旅の人

全国の若者に受けている 有名神輿一覧

サマケ崎海岸浜降祭／神奈川 7月15日

早晚、千数基の神輿が海浜を渡御乱舞する。海の大祭では神輿の数日本一。遠く建久の昔より行来している由緒深い祭典だ。

かけ声「ドッコイシヨエ」

下谷神社大祭／東京 1年おきの5月11日

下谷神社のジャンボ神輿に、60基の町内神輿が出る。

かけ声「チイヤー、チイヤー」

三社祭／東京 5月

浅草神社は三社様とも呼ばれる浅草二月の鎮守様で、一之宮、二之宮、三之宮の3基の神輿に、100基以上の町内神輿が加わる江戸っ子の祭。



神田祭／東京 5月

江戸時代は30数基の牛にひかれた山車だった。山車がいつか町内神輿に変わった。

一之宮、二之宮、三之宮の神輿に、神田と日本橋の18町から、100基近い町内神輿が町を練る。

鳥越神社大祭／東京 6月の第2日曜日

重々東京一といわれる、千貫神輿が出る。

大神輿を中心に、代子町内の神輿60基が絡み

ずい祭／京都 10月1日〜4日

藤原時代からの歴史の古いお祭。毎秋収穫物を神にそなえ、豊作かね収穫を感謝したのが始まりで、ずい、神輿が生まれた。イモ、ナス、モウリでまわっている。

祇園祭・神幸祭／京都 7月1日〜28日

3基の神輿が出る。神輿洗。神幸祭。豊年祭。妻度のけんか祭／兵庫

松原八幡神社のる基の神輿をぶつけ合っ
い格闘する。





福島 わらじ神輿

わらじ祭／福島 8月1、2日

福島市内、70〜80基のわらじ神輿がパレード。

富土吉田火祭／山梨県 8月26〜28日

富土山型まの神輿約6キロが1基。

和霊神社夏祭／愛媛 7月23、24日

3基の神輿が、渡御する。

鹿島神社秋祭／愛媛 10月12日

男の神輿、女の神輿が、まじりあつ。神輿結姫目

糸魚川けんか祭／新潟 4月10日

早朝一太宮の押上神輿と寺町神輿のぶつかり合ひ。

御輿まくり／長野 7月22、23日

神輿を横にトロンロン、タマシロロン、めぐるまにします。

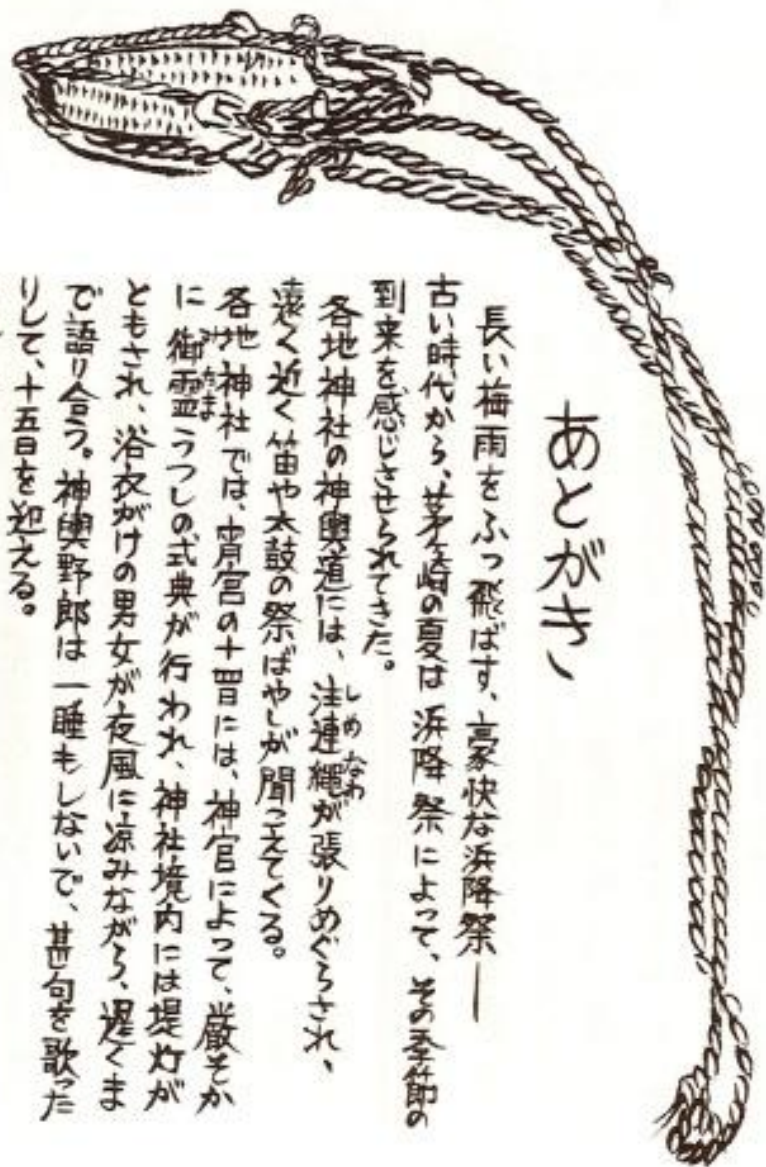
美濃の花みこし／岐阜 4月14日

八幡神社の春祭、32基の花神輿がでる。

あはれ祭／石川 7月7日、8日

八坂神社、神輿を海に投げ込み、ズタズタにする。

山田の豊漁祭／山手 9月16日



あしがわ

長い梅雨をふっ飛ばす、喜ばしい浜降祭——

古い時代から、茅ヶ崎の夏は浜降祭によって、その季節の到来を感じさせられてきた。

各地神社の神輿道には、注連縄が張りめぐらされ、遠く近くは由や太鼓の祭ばやしが聞こえてくる。

各地神社では、宵宮の十日には、神官によって、厳密かに御霊まつしの式典が行われ、神社境内には提灯がともされ、浴衣がけの男女が夜風に涼みながら、遅くまで語り合つ。神輿野郎は一睡もしないで、昔句を歌ったりして、十五日を迎える。

これは、古い時代には、茅ヶ崎市や寒川町をはじめ、遠く用田や三浦半島までが圏内で、浜降祭一色に染まっていた。



されてきた。七月十五日は、会社、銀行、官庁、学校などは休日とされ、その前後十四日と十六日は、短縮時間となっていたので、祭リムードは最高の盛り上がりを見せていた。然し、この素朴な浜降祭も年々あり方が変わってきた。高度経済成長の時代に入ると、様相は一変し、昭和四十年前後から交通事情の悪化等で、厳しい規制がひかれ、道路の神輿渡御は、昭和四五年から禁止され、西浜まで車で輸送することとされ、西浜から南湖海岸だけが、若者の手によって、担がれ練り歩く上敷いものとなった。鶴崎橋宮近くの国道二号線に二十数基の神輿が一堂に会し、海岸まで渡御していた行事もとりやめとなった。それまでの神輿の出陣（お立ち）は早く、外はまだ闇に つまれている早暁、神輿の台輪の環が、ザツザツと鳴る音が遠く聞こえて来ると、神輿野郎は、頭に血がのぼって、武者ぶるいをしたものであった。私もその部類で興奮したものである。子供達は母親に「神輿のお立ちだ」と起され、おむい目をこすりながら、急いでワラジを



はいて神輿のあとを追ったものである。各地の神輿道は、もう木愛な人垣で、若きも老いも押すな押すな盛況であった。南湖海岸には、各地の神社の懺が（おんげん）翻（ひん）とひるがえり、鮎とおでんとほおずきの店が立ち並んで、女の子はほおずきを見ると、「買って」とせがむ光景が見られた。浜降祭が終わると、女の子の間ではほおずき遊びが暫く続いた。ほおずきは中の種を出すのが、むずかしく、みんな途中で、破れてしまう。種がずに、ゆっくりと手でもむと結構塵が出る。種を上手にとってほおずきに作り上げるまでが楽しみで、口にいれると妙な匂いと苦みがある。女の子は口に含んで、ピーツ、ピーツと音を立てたりしていた。

ほおずきの店は、今は細々と続けられているが、ほおずきを思いつく人は、ほおずきそのものを買うのでなくて、浜降祭の気分や幼いときの追憶や郷愁を求めているのであろう。

かくて、交通規制解除のため、年々減少されていた浜降祭であったが、昭和五十一年をピークとして、悪条件を克服して、見



事復活した。昭和51年は西基の神輿と10万人の
 人出で、盛大な暁の祭典。法隆祭が再現した。
 神輿を愛する人、茅ヶ崎市民の熱意が、交通規
 制の流れを、大分変え緩やかにした。
 昭和51年には、テストケースとして、寒川神社、鶴嶺神社
 など六社が、二時間近くもかけて、南湖海岸まで、
 渡御するようになった。

法隆祭の歴史は古い、鶴嶺公権宮や南湖登
 の藤祭、そして寒川神社の神輿標着説など、古
 代から行われてきたものを、後に(明治九年)に、毎
 年七月十五日に、海の豊漁、山の豊作(おれ参り)を
 祈願して、法隆祭の神事と定め、各地神社の合同
 祭典として、現在まで続けられてきた。

さて、式典から還幸した各地の神輿は、神幸を
 各町内に巡幸して人々の幸を祈り、やがて宮入
 リとなる。

この時はすでに廻りは闇の夜となり、提灯に照



らされた神輿が

「明日は、ネーソーエ」

と勇ましい掛け声でもむ、光りと闇の対比の中で練
 る神輿の神祕。

宮入りをするまわると、いつまでも、いつまでも 耳の奥に
 ドド「ヤッショエ」ッ「モッロイッショエ」
 のなつかしい人声韻が、こころよいま渡り感と、共に
 残るのである。

昭和五十二年七月吉日

高橋昭和

洪降祭

発行

昭和五十二年七月十五日

著者

高橋 昭 和 (TEL 856288)

〒283

茅ヶ崎市円蔵三六〇五

印刷

アルファ